



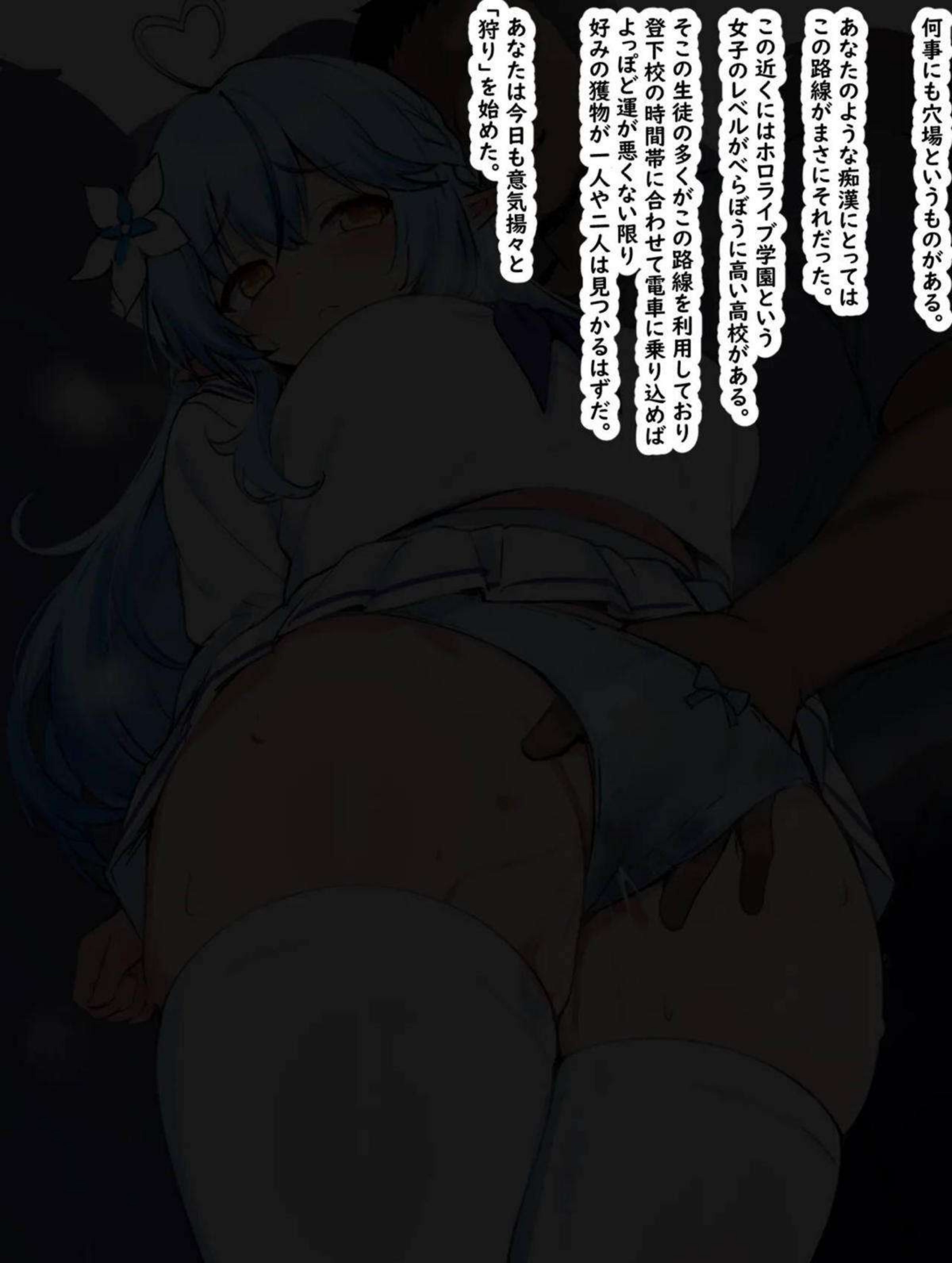
何事にも穴場というものがある。

あなたのような痴漢にとっては
この路線がまさにそれだった。

この近くにはホロライブ学園という
女子のレベルがべらぼうに高い高校がある。

そこの生徒の多くがこの路線を利用しており
登下校の時間帯に合わせて電車に乗り込めば
よっぽど運が悪くない限り
好みの獲物が一人や二人は見つかるはずだ。

あなたは今日も意気揚々と
「狩り」を始めた。



「いいやつ……
やめてくださっ、んんんっ♡」

可愛らしい抵抗を嘲笑うかのように
あなたは彼女のパンティに手を突っ込んで
おまんこを無遠慮に掻き回した。

「らめっ……♡
そんなにぐちゅぐちゅって音立てたら……
周りに聞こえて、き、気づかれちゃ……♡」

「くく……もしそうになったら
もう学校に行けなくなるね。
ラミイちゃん？」

「ふえっ……」

ど、どうしてラミイの名前……♡」

「さあ、どうしてだろうねw」



特に目ぼしい痴漢ターゲットは仲間内で情報が共有される。

彼女、雪花ラミイもその一人だった。学年、クラス、住所、それにスリーサイズくらいなら調べがっている。

ラミイからすればいいんだけどここまで情報が握られているかわからず、あなたに歯向かう気力をごっそりと削いだ。

「あーあ、もうパンティがびちゃびちゃだ。こりやもうノーパンで帰るしかないなw」

「んおっ♥ おんっ♥

や、やだああ……

おまんこ汁が、溢れて……♥」

「そうだよ。足元を見てみな。ラミイちゃんの愛液が水溜まりにみたいになってるよw」



「あーあ、メス臭がむんむんで
ちんぽがイラつくなあ……どうしよっかなあ？
どこかにこのイラつきを鎮めるための都合のいい穴とかないかなあ？」

「ひっ♡ な、ないです♡
そんな穴ないよお……♡」

「そうかなあ？」

「ここにある気がするんだけどなあ？
いい感じにほぐれてハメ甲斐の
ありそうなメス穴がW」

「ち、違うう♡」

「ラミィのおまんこはおじさんの
ムラムラを発散するためのフリーオナホじゃ——」



「あつ♡ やっ……ぬ、抜いてええっ♡
な、なんで挿れるのお♡
だめってゆったのにいい♡」

「わかってないなあラミィちゃんは。」

そんな風に言われたら余計にレイプしたくなるに決まってるじゃんw
今度痴漢されたときは気をつけなよ?

今回はその勉強代ってことで使わせてもらおうねw

「や、やだあ♡

おちんちんやだああああ♡」

あなたはラミィのデカパイを鷺掴みにして
がたんごとんと揺れる

電車のリズムに合わせるみたいに腰を振った。



嫌がっているくせにラミイのおまんこはぐちよ濡れて、
その美貌からは想像もつかない下品な喘ぎが止まらない。
やっぱり女なんてのは所詮、ちんぽを気持ちよくするための
肉穴なんだなあとあなたはほくそ笑んだ。

「ラミイちゃんの気持ちいいところは
どこかなあ……ここか？」

「おふんっ♡」

「お、ここが好きなのか？ ほれ、ほれ」

「おッ♡ おっおっおっ♡」

「しょこ、らめえ♡」

「イ、イっちゃ……イっちゃいますうう♡」

呆気なくレイプちゃんぽに屈した
ラミイまんこから「ぶしゃっ♡」と潮が噴き出した。



「ラミィちゃんのおまんこ、ざっこいなあw
これからの人生で何度もレイプされるだろうに
そんなザマじゃ大変だろうねえ……
知ってる？」
女ってアクメ中に種付けされると
高確率で孕んじやうんだよw」

「はうう♡
そ、それって……まさか♡」

「まさか……なに？ 言ってみろよw」

「ま、まさか、おじさん……
このままラミィの中に……
お精子出す気じゃ……♡」

「ぐふw
大正解だ……さあ出すぞ！
妊娠しちまえ！」

「やつ♡ 待つへ……
ああああアアア—— ツ♡♡」



どくっどくっどくっ!!

ラミイの膣奥に押しつけられたちんぽからザーメンが溢れ出す。
若いメスに無理やり中出しするこの快感、恍惚、支配する悦び――
何度味わっても堪らない。

「お、願っ……♡
ぬ、抜いてえええ……♡」

「ここで抜いたら電車が汚れちゃうだろお？
ラミイちゃんのおまんこが搾り取った精液なんだから
責任取って全部受け止めるんだよ……
うほっまだ出るw」

「も、もう出さないでえ♡
孕んじやうう♡
本当に孕んじやうからああ……♡」



次の日――

「おっほお、なんだよこのデカ乳W
本当に女子高生かよW
さすがはホロ学一の爆乳娘の
ノエルちゃんだねえW」

「やあ、んんっ……♡
こ、こんなところで、おっぱい丸出しにしないでえ♡
んはあ♡
乳首っ弱いの……こりこりしないでえ……♡」

あなたは満員電車の中で
規格外のおっぱいを好き勝手に揉みしだいた。

あなたの両手に収まりきらない豊乳の柔肉が
ぐにゅぐにゅと形を変えて指の間から零れ落ちる。

ガキの分際でこんなけしからん乳をして、もうこれだけで正当なレイプの理由になるだろう。



「も、もうやめてください♡
ほんとに、もう……♡」

「ケチケチすんなよノエルちゃんW
こんな身体なんだ、どうせ痴漢くらい
毎日されてんだろ？」
ほらどうなんだ、答えろ！」

乳房をぎゅうつと圧迫する。

ノエルは「んほおおッ♡」と野太く鳴いて、

「は、はい♡ 痴漢は、その……毎日されてます♡

行きも帰りも、当たり前前みたい……

胸だけじゃなく、お尻とか、太腿とかいっぱい触られています♡

で、でも、ここまでされたことなんて、一度もなっ……♡」

「おいおい、根性のねえ痴漢どもだなW

こんな爆乳、直揉みしねえなんて嘘だろW」



「んやあああああ……
そ、そんなに強く掴まないでええ
おっぱい潰れちゃうよおお♡
らめっ、らめええ……
き、気持ちよくなんか、なりたくないのに♡
痴漢さんにおっぱいいイジメられて……
イ、イぐうううう♡」

あなたの腕の中でノエルがびくんびくんと痙攣した。
股の間から愛液のシャワーが「ぶしゃああああ♡」と降り注ぐ。

「おいおい、ノエパイ敏感すぎかよw
サイズがデカすぎると胸では感じにくくなるって聞くけど
ノエルちゃんくらい淫乱になると関係ないんだねw」

そろそろあなたのちんぽも限界だ。

あなたは次の駅で電車を降りると、ノエルを男子便所に連れ込んだ。



「おんっ♡ おんっ♡ おんっ♡ おんっ♡ おんっ♡」

「おお、締まる締まるW
ノエルちゃん、剣道やってるんだっけ？
よく鍛えられたいいまんこじゃんW
ピストンが止まらねえよ……あーレイプが捗るううW」

「あっ♡ ひあっ♡ しゅっ♡
お、おちんぽぎぼちいいッ♡」

便座に腰掛けたあなたは
対面座位の格好でノエルを犯しまくった。

当然のようにナマハメで
避妊するつもりなど端っからない。

ど迫力のデカ乳に顔を埋め、
その谷間で深呼吸をすると
濃厚なメスフェロモンが、
肺いっぱいに取り込まれた。



「聞いたよ?」
ノエルちゃん、小さい男の子が好きなんだって?」

「ひゃ、ひゃいいい♥ そうなんです♥
お、おじさんみたいなのなんて、まったくタイプじゃないのに……なのにい♥
おちんぽが気持ちよすぎて……ど、どんどん好きになっちゃってるよおお♥」

「くくく……いいことが知れてよかったじゃないかW
がきんちよのちんぽじゃこうはならないよ?

ノエルちゃんみたいなエロまんこを満足させるには
しっかりとした大人ちんぽで乱暴に突いてやらないとね。
こんな風に!」

「ンっほおおおおッ♥
さ、刺さりゅ♥♥
デカちん刺さってりゅうう♥」



「ひぐうう♡

イ、イ……イきゆう♡

大人ちゃんぽにわからされてまたイっちゃうう♡」

「あ、また勝手にイきやがったな！

腰も無様にへこへこ振り乱しやがって……

自分がレイプ被害者だってこと覚えてる？

これじゃあどう見ても同意のセックスだよ？」

「ち、違っ♡

同意なんて、してないもん♡

む、無理やり、犯されてるだけだもん♡」

ノエルは見え透いた嘘をつきながら
その爆乳に引けを取らない巨尻を
淫らに上下させてあなたの肉棒を
扱き上げてくる。

「くっ……許可なく盛りやがって
ウシ乳メスガキめ……！！
おらっ出すぞ！」



「おっほオオオ
ほっ、おとおおとおおとおおん……♡」

「あー出るっ……」

JKのぴちぴちまんこに無責任中出しサイコーW

「ああ、あッ♡ あちゅいの、中で、いっぱいいい♡
ぬ、抜かなきゃいけないのに……ど、どうしてえ♡
身体が勝手に根本までおちんぽ迎え入れて♡
一番深い場所でお射精受け入れちゃってるよおお♡」

ノエルは、名前も知らない男に種付けされながら
呑気にアへ顔を晒し、
この期に及んでケツを振り続けていた。

「くっくっく……
このデカパイからミルクが
出るようになる日も近いなW」

ほオッ

どわー

おッ

おッ

おッ

んんん

んんん

んんん

んんん

「ぜーんぜん起きる気配がないなあ。
部活で疲れてるのかなあ?」

「んん♥ しえんぱい……♥」

「あん? 先輩つつたか……?
おいおい、誰だよそりゃあ?」

あなたはスバルのスマホを勝手に拝借して
メッセージのやり取りを覗く。

どうやらスバルは同じ部の
先輩と交際をしているようだった。

「マジかよ。男っ気なさそうなのになあ……
あー、なんか腹立ってきた。」

男いるくせに、おじさんの純情を弄んだんだね?
こんなえつちな身体を無防備に晒してたくせにさあ。
こいつはお仕置きが必要だなあ……と、その前に」

あなたはスマホを操作して
スバルの彼氏にテレビ通話をかけた。



愛しの彼女からの電話のはずが見知らぬおっさんが登場し、スバルの彼氏はそりやもう愉快的なほどに狼狽していた。

あなたは彼氏から矢継ぎ早に飛んでくる質問をすべて無視して、こっちの要件を一方的に伝えてやる。

「やっほー彼氏くん。見てるう?w」

「今からキミの大切なスバルちゃんをおまんこレイプするんだけど……黙って使うのも悪いから連絡だけはしてあげようと思ってさ。つか、こんな可愛い子を一人で帰らせるなんてよくないよ?世の中には悪い男がどこにでもいるんだからさあw」

あなたはスマホを対面の座席に立てかけた。もちろんスバルのレイプシーンを見せつけてやるためだ。

何事かを喚く彼氏を無視してちんぽを取り出すとあなたはなんの躊躇もなくスバルのおまんこに挿入した。



「おほおー気持ちいいーW
スバルちゃんのおまんこところとろだぜW
つば人の女を犯すのは格別だなあーW」

「んあ……あつ♡
ああ♡ あん……っ♡」

「くうう、なんつー締めまりだ……
さては彼氏くん、短小かあ？

スバルちゃんの穴、
俺にはちよっときつすぎるなあW
ま、遠慮なく使わせてもらうけどW」

「ひあつ♡
あう……せ、せんぱい……？」

スバルの目蓋がうつすらと開かれた。

「おはようスバルちゃんW
いいところで起きたねW」

「あ♡ え♡
先輩……な、なにしてるのお♡」

どうやらスバルは
寝ぼけてあなたを彼氏と
勘違いしているようだった。

こいつはいい。



「ナニって……見ればわかるだろ？
スバルちゃんのおまんこに、ちんぽ挿れてんだよw」

「あ……ほ、ほんとだ♡
先輩のが、スバルの中に……んっ♡」

「な、なにこれ……♡
なんかいつもよりおつきくて
き、気持ちいい……♡」

スバルは快楽に蕩けた笑みを浮かべて
あなたの首に両手を回した。

スマホからは
彼氏の悲痛な呼びかけが続いているが
スバルの耳にはまったく届いていない。

「なあ、スバルちゃん……
このまま中に出していいかな？」

「ふえ♡、ら、らめらよ♡
そんなの、赤ちゃんできちゃう♡」

「いいじゃん。」

俺達付き合ってるんだろ？

彼女だったら中出しくらいさせろよ」

ぽんっ

ぽんっ

ぽんっ

ぽんっ

ぽんっ

「でも、先輩……♡
いつもは……自分から外出して……♡
お、俺達はまだ学生だから……
そういうのは卒業してからって……♡」

「気が変わったんだよ。
お前みたいなスケベ女、
種付けせずにいられるかってんだ」

あなたは容赦のないピストンを行い、
スバルのおまんこに精液コキ捨てる準備を
急ピッチで整えていく。

「んっほおお……♡
お、おちんちん♡
びくびくって、震えて……♡
せ、先輩……本当にスバルの中に、出そうと……♡
ああ、待ってえ……♡
スバル、まだお母さんになるの無理い……♡」

「大丈夫W
スバルちゃんならきつと
いいお母さんになれるよ。
じゃ、出しちゃうね?」



「んおっ♥ おお、おおおオオ……っ♥♥
せ、せんぱっ……♥
だめだよお……だめええ……♥」

「ああああっ出る、出る！
ほら、わかる？
赤ちゃんのお部屋にくっさい精子が
びゅるるって注がれちゃってるよw」

「ふああ……♥
出され、ちゃったあ……♥
スバル、まだ大人じゃないのに……♥
先輩のおちんぽで
妊娠させられちゃったよお……♥」

スバルは最後まであなたのことを
先輩だと思い込んだままだった。
背後に振り向いてニヤリと笑う。

スマホの中で
スバルの彼氏が股間を膨らませながら
悔しそうに肩を震わせていた。

「ってことでさ。

痴漢レイプで妊娠しちゃったなんて知ったら
スバルちゃん可哀想だし黙っておいてあげなよ？
なーに、キミが責任取れば丸く収まるってw」



















